

資本理論の動向

中山伊知郎

「資本理論の歴史は論争にみちている。ボエーム・バヴェルクやJ・B・クラークその他によつて論議された諸問題が三十年代においても再び吟味せられた。資本理論についての文献の洪水にもかかわらず、基本的な見解の相違は依然として解決されていない。」人は資本理論の混乱に関するこの言葉を幾度きいたことであろうか。五十年前にもそうであつた。三十年前にも二十年前にもそうであつた。そして吾々がここに引用した一句は一九五〇年のアメリカ經濟學會の年次總會において加洲大學の教授フレッド・ウェストンによつて報告の冒頭に述べられているところである¹⁾。

1) J. Fred Weston, *Capital and Interest*, *American Economic Review*, May, 1951, p. 129.

資本理論のこのような混乱は何處に原因をもつか。最も重要な點は、それが時間をよくむ理論であり、その時間的理論的な處置が極めて困難であるといふところにあるであらう。經濟現象が最も一般的な意味において時間の函數であることは早くから指摘されていた。時間を獨立の變數として含む方程式組織のみが眞の動態であるといふ見解も今日では少しも珍らしくない。しかしその時間が眞に理論的な形において經濟學の中にとり入れられたのは最近のこと

であり、しかもその理論の地位は動學一般の困難と共に、未だ確立されたものではない。一例をとろう。景氣變動が時間における現象であることは一般の常識であつた。しかしその時間における變動の経過を理論的な意味において把握し得たのは漸く最近時のヒックスにおいてである。²⁾ヒックスの業績はマクロ・ダイナミックな體系に「時のおくれ」を導入して、形式的にはあるが景氣變動の波動を理論的にあつづけることを得た唯一の文獻といつても過言ではあるまい。一般に本當の意味で時間における變動を理論化することの出来たのは、定差方程式による分析が導入されてからのことであるということが出来る。その理論は勿論これを景氣變動論そのものとして見れば、理論の一切をつくすものではない。しかし動學論がこのような形において始めて理論的に成立したという事情は、同じく時間要素を生命とする資本理論の混迷を證明するものでなければならぬ。

2) J. R. Hicks, A Contribution to the Theory of the Trade Cycle, 1950.

資本理論の發展が一般的な動學理論の發展とその運命を共にするというのは、勿論、資本の理論が内容において經濟理論一般といささかもその廣さを異にしないということから來ている。資本はかつて労働や土地と並んで生産の要素として論じられ、それが本源的な要素であるか、永續的な要素であるかが問題とせられた。しかし論争の中から生れ出た今日の認識では、例えば上掲ウェストンも指摘しているように「それが本源的な要素でも永久的な要素でもないことには一般の了解が成立している」³⁾。すなわち資本が單なる生産以上の何ものかであることは、今日の理論的常識である。近代の理論では、さらに、資本は投資と同一視せられている。しかしこれを投資といいかえて見ても、資本のもつ一般的な作用はいささかも限定せられない。それは貯蓄との關係において、また更に所得との關係において、

依然として經濟活動の一切をふくみ、ある意味においては一切の變動の原動力たる地位をもつものである。

3) J. Fred Weston, op. cit. p. 143.

このようにして資本の理論はいま新しく發展途上にある動學理論と共に再考せられる地位にあり、事實そのような研究は日を追うて重ねられつゝある。先づ第一にこれを新しい動學理論の上に展開することを可能にしたものはケインズ理論であろう。ケインズはその著の何れにおいても特別に資本理論にあたるものを説いてはいない。「一般理論」において三つの獨立變數と呼ばれるもの——消費の性向、流動性選好、資本の限界効率——の中ケインズが最も少くその説明を費しているものは資本の限界効率であるし、その限界効率の意味も資本理論的には極めて部分的な資本現象をとらえているにすぎない。しかし、投資を貯蓄との關係において總體的に把握し、さらに投資と貯蓄との關係を所得に關係づけて説明した「一般理論」は廣義において資本理論そのものであるといえる。いな資本の問題はそのような全體的な把握の下で始めて經濟の爾餘の現象との關係を明かにせられたのである。このことはケインズ以後のマクロ・ダイナミックな分析が如何なる方向をとつたかを一見すれば一層明白になるであろう。實際ケインズにあつては動學分析の武器はまだ充分にはみがかれていなかった。「時の遅れ」の問題も大きな假設の下でとり上げられていたにすぎないし、理論の全體はなお靜學的な性質を脱していなかった。しかし成長したあとから見れば、ケインズにおける動學分析の意圖はこの領域に大きな貢獻をなしたといわざるを得ず、投資の理論として展開された資本理論にも、従つて見るべき若干の成果があげられている。總體的動學均衡の條件に關する近時の諸研究は、その中でも最も直接に資本理論に關係するものといえるであろう。

發展する經濟的均衡條件に關する問題は遡つていえば新ヴィクセル學派の貯蓄^{II}投資論に端を發するものであるが、最近年においてはハロッド、フェルナー、ドーマー、ヒックス、サムエルソンによつて引續き活潑に展開されている。これらの研究には今日のところなお共通の確定理論は成立しておらず、従つてこれを一般的に示すことは困難であるが、今ノートンの要約するところに従つて、その中の資本理論の位置を示せば次のようになる。⁵⁾

$$(1) S = \gamma Y$$

$$(2) I = \beta Y$$

$$(3) \gamma Y = \beta Y$$

式におつての S は貯蓄、 Y は所得又は產出高、 γ は貯蓄性向、 I は純投資、 β は資本係數である。この一聯の式は、従つて投資と貯蓄とが均等であるという均衡の條件を示すものであり、同時にケインズに始まる經濟モデルの最も單純な表現である。問題は第(2)式にある。第(2)式はこれを資本に對する需要の形にかき改めれば

$$K = \beta Y$$

とすることが出来るのであるが、それは所得の増加の如何にかかわらず、生産の技術係數が固定的であるか、あるいは同じことであるが利率及び要素價格が不變であることを示す。この假設が許される限り、保證された所得増加率 (warranted rate of income growth) と自然的な所得増加率 (natural rate of income growth) の概念をこれに關係せしめて、資本的な經濟擴大の過程を例えればハロッドの如くに展開することは容易であらう。ハロッドの理論について極めて異なる立場をとるかに見える他の諸理論も、それがケインズの理論を出發點とする限りにおいて、お

よそ同様の構想をもつものとして出ることが出来る。

- 4) Harrod, Essay in Dynamic Theory, Economic Journal, 1939; Towards Dynamic Economics, 1949. Feller, Monetary Policies and Full Employment, 1946. Domar, Capital Expansion, Rate of Growth, and Employment, Econometrica, 1946. Hicks op. cit. Samuelson, Interactions between the Multiplier Analysis and Principles of Acceleration, Review of Economic Statistics, 1939.
- 5) F. E. Norton, Capital Theory and Progressive Equilibrium, American Economic Review, May, 1951.

この方向における理論の展開は、すでに述べたように動學理論の新しい展開によつてさらに大きな進展が期待されるであろう。けれども、右の如きマクロ・ダイナミックな分析方法には、少くともこれを資本理論の立場から見るとき一つの制限があることを注意せねばならぬ。それは右の一般式に示された資本係数が極めて一般的な假設に立つており、その假設は技術的進歩と構造的變動との何れをも容易にとり入れ難いということである。實際

$$I = K = \beta Y$$

- 5) という前述の假定の下においては、所得又は産出高 Y の一定の増加が與えられ、かつ事前的な限界資本係數 β が與えられるときには、計畫された誘導投資 I は常に βY に等しいこととなる。換言すれば累積原理が單純に投資擴大についての誘導投資論を與えることになる。しかしこの理論をもつてしては資本の深化は説明することが出来ない。オーストリア學派の資本理論がハイエクの有名な三角圖形に表現されるように資本構造の深化過程に重點をおいたことは改めて指摘するまでもないところであるが、いまマクロ・ダイナミック分析において、そのモデルの中に豫想されてい

る資本理論にはそれをとり上げるべき餘地が殆んどないのである。

マクロ・ダイナミック分析は、資本における時間の問題をいわば平面的にとり上げること成功した。けれどもこれを立體的にとり上げることには充分に手掛りを與えていない。オーストリア學派はハイエクの「資本の純粹理論」において抽象的にはこれがある頂點にまで追いつめ得た。しかし右のモデルにおける β がスターンや、フェルナイによつて統計的に算定されたのに對して、オーストリア學派の抽象理論には統計的に接近すべき手段が與えられていない。それら二つの點に顧みてここでマクロ・ダイナミック分析に代るものとして考えられるのは、例えばレオンティエフによつて試みられている個別産業における資本係數の測定であろう。總じてレオンティエフ流の産業交流的な研究の企圖するところは、現實に産業間に行われるインプット・アウトプットの關係に着目して、ここから經濟の全體を把握しようとするものであり、總體的な分析に對してはむしろ限界的な分析に中心をおくものということができる。グッドウインのマトリックス・マルチプライアーの理論は、後の立場を理論的に一層明白にしたものであり、ヒックスの「景氣循環」における分析と鮮かな對立を示すものといふことが出来るであろう。

6) E. H. Stern, *Capital Requirements in Progressive Economies*, 1948; William Fellner, *op. cit.* p. 80.

要するに最近代の資本理論は、理論一般における動學分析の發展と共に、ようやく新しい研究の段階に入ろうとしている。それがもつ固有の困難たる「時間」を如何に克服し得るかにかかつて動學理論一般の發展に依存するものといえるであろう。われわれはこのような觀點から資本の問題を考えるために、改めて學說史研究の必要を痛感し、共同研究を計畫した。次に示す二つの論文の一方はケインズの一般理論を資本の理論としてとらえて、資本を所得の再生

産過程の一塊として理解すべく試みたものであり、その二はレオンティエフを中心に經濟變動の構造理論を展開したものである。企圖された研究の中で二つの論文がそれぞれにもつところの意味は以上の敘述によつてすでに明白であらう。これらの研究を重ねることによつて、混迷をなげかれる資本理論の上に何らかの光を投げかけることがわれわれの目標である。最後にこの研究が昭和二十五年度の科學研究費によつて援助されたものであることを記して感謝の意を表したい。